

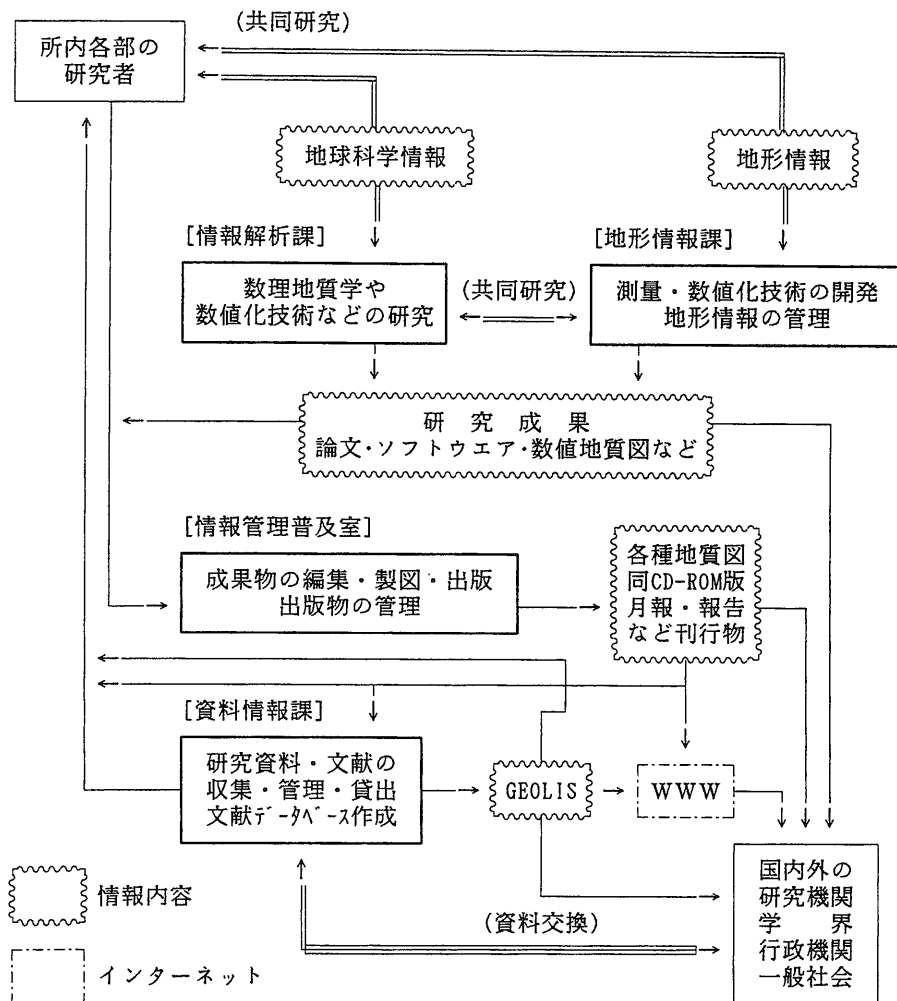
10. 地質情報センター

—地球科学研究情報の十字路口—

地質情報センターには、1つの研究課と3つの行政課があります。当センターは、数理地質学的研究の中心であるとともに、所内の各研究者と国内外の研究機関・学界・行政機関をはじめ一般社会との間を結ぶ、研究情報のインターフェースとしての役割を果たしています。当センターを中心にした研究情報の流れは、第1図のとおりです。

1. 各課の業務

1) 情報解析課では、数理地質的な研究や地球科学情報の数値化・情報化技術に関する基礎的な研究をしています。その成果の一部として、1995年には数値地質図「100万分の1日本地質図（第3版）CD-ROM版」が発行されました。これについては本誌no.493（1995年9月号）でも特集されました。



第1図 地質情報センターを中心にした研究情報の流れ



写真1 雲仙普賢岳の山体の変動の様子を光波測距によって観測しているところ。

2) 地形情報課では、地形図など地形情報の管理を行う一方、光波測距やGPSによる地形測量技術の開発を行っています。雲仙普賢岳の噴火の際には、環境地質部との共同研究の中で山体の変動を光波測距による連続観測をして成果をおさめました(写真1)。

3) 資料情報課では、当所と世界約160ヵ国の770研究機関との間の地球科学に関する研究資料の交換・提供にたずさわっています。収集した資料の中には、きわめて貴重な外国の地質図も含まれています(写真2)。また当所に所蔵する地質文献(年間約9000件)のデータベース(GEOLIS)を構築して好評を得ています。

4) 情報管理普及室では、所内の研究者から出される研究成果を、多種にわたる地質図や報告書、あるいは「地質調査所月報」や「地質調査所報告」として公表するための編集・製図・出版の業務をします。またこれら出版物の管理も行っています。

2. 情報化時代の地質情報センター

最近、CD-ROM装置や大容量のメモリーを搭載した高性能のパソコンが普及し、家庭でもインターネットが使えるようになるなど、電子情報化の潮流が急になってきました。したがって研究情報を従来の図面や冊子などの印刷物ばかりでなく、CD-ROMやインターネットなどの新しい媒体によって提供する時代になりました。いまはその過渡期にあたるといえましょう。

所内の研究者からは、各種報告書の原稿がフロッ



写真2 資料室の書庫のスタックランナーには、きわめて貴重な外国の地質図も保管されている。

ピーディスク(ASCIIテキスト)の形で当センターに提出されるようになり、その電子化は容易です。

CD-ROM出版は、前に述べた「100万分の1日本地質図」をはじめとして、今後この種の出版が増えてゆくものとみられます。またインターネットについては、WWW(World-Wide Web)の地質調査所のホームページ(<http://www.gsj.go.jp>)に、当所で出版された各種地質図の目次が掲載され、またGEOLISによる文献の検索もできるようになりました。

情報解析課では目下、地質図類の数値化を進めています。これらの数値化された地質図をベース(基図)にして地球科学データと重ね合わせれば、従来にならなかった新しい種類の図を描くことも容易にでき、これまで見えなかった現象が見えてくる可能性もあります。

数値化することで、新たな利用が期待される研究データをざっと挙げてみると、

- 1) 地質図・磁気異常図・重力図などの図面類
- 2) 岩石年代・岩石分析値などデータ
- 3) 地質標本データベースなどの検索情報
- 4) 文献情報・地質図情報などの索引
などが考えられます。

地球科学データの情報化の促進には、研究部門による新技術の研究開発と、行政部門によるデータベース作りなどの継続的な業務との有機的な連携プレーが必要になります。当センターは、情報化の時代における当所の研究成果や研究情報を社会へ向けて発信し交流するための名実ともに「センター」となることを目指しています。 <文責：吉井守正>